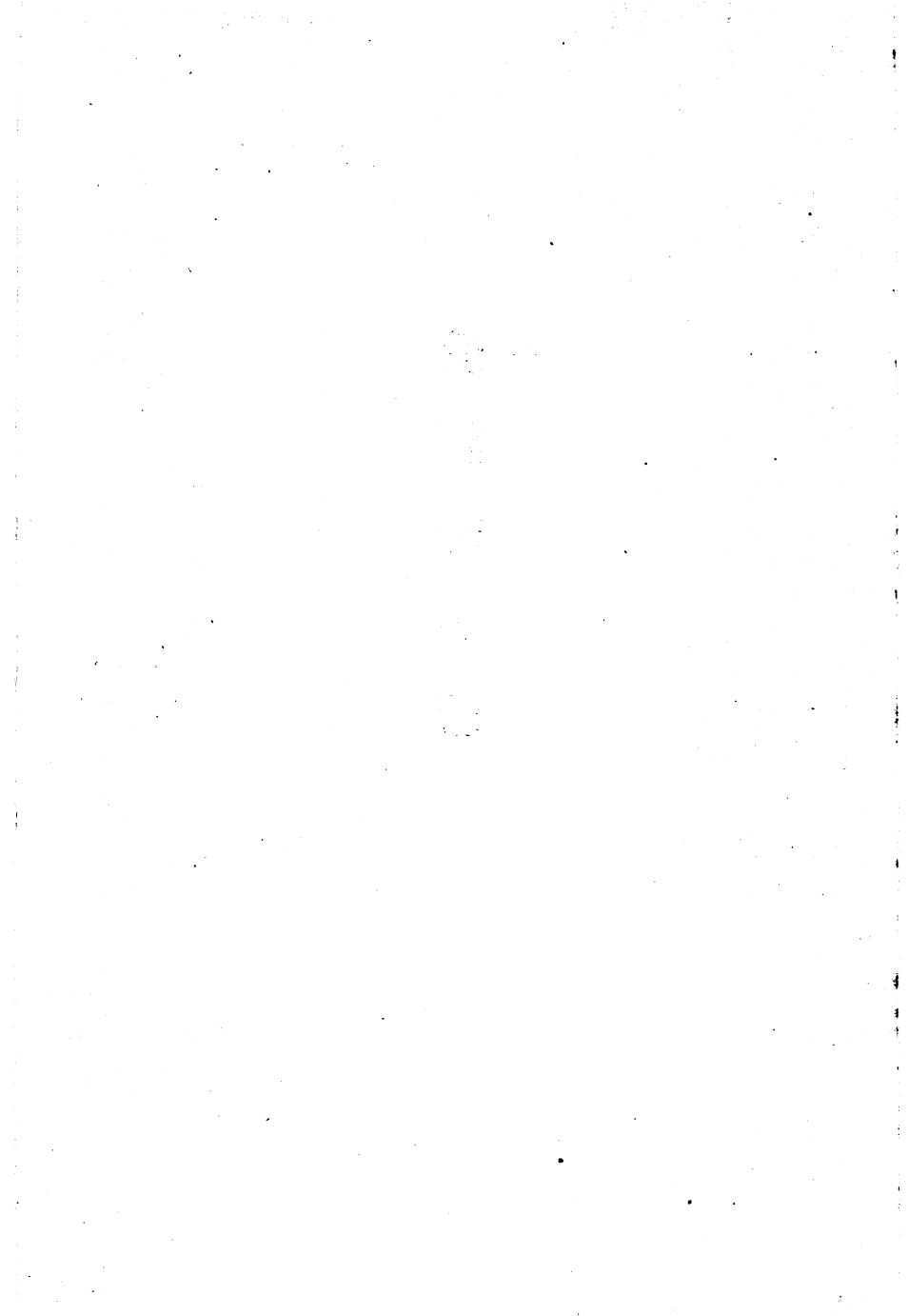


愛護若堦箱



愛護若峙箱

作者 紀 海 音

序詞鷹言軟語皆第一義に歸し。治生産業おのづから實相に背かず。智門は高きを勝れたりとし。悲門は下れるを妙なりとす。低き人の丈較べはひくきを勝ちするが如し。無相の法身皆一智毘盧の全體なり。暫らく劣機に近づきて強剛の衆生を利す。和光同塵神津國幾萬代の末久に。豊秋津洲の御主。仁明天皇の オロシ御聖徳へ傳へ聞くこそ。有難き。地色肥近多き其中に二條の左大臣清平公。古今に秀てし英才なり。又六條の右大將有雄卿と聞えしは。させる學智もなけれども御外戚の威を振るひ。我より上に立つ人を嫉み妬んで色々と。讒者の辱動くこそ。道明らけき九重のフシ月に。雲ある如くなり。地色然るに春の末よりも天皇御不豫の事ありて。晝の御坐に垂籠めて打臥し惱ませ給ふ故。地當時の名醫入り代り倉公華陀が手をつくし。陰陽の頭當年の星を勘へ易を繰り。諸寺の高僧壇上に孔雀明王藥師の法。丹誠無二の御祈禱もいまだ效驗見えざれば。月卿雲客堂上に額を鳩め氣を痛め。武官の輩は庭上に弓矢た抜き居流れて。縦へ變化の業なりとも目にだに懸らば射伏せんと。思ひ込んだる有様は。フシ嚴めしうこそ見えにけれ。地かゝる所へ比叡山師の阿闍梨參内あり。謹んで宣ふは。詞玉體御惱の御祈り山門は申すに及ばず。諸寺諸山の僧徒ども至情を抽んで候へども。更に效驗あらぬ事不思議の思ひをなす所に。老僧夜前あらたなる瑞夢を蒙る其意趣は。此度帝の御祈願には神明和光の力を頼み。玉城の未申別雷山の麓にて。洗鎗馬を興行し二條の家に傳はりし。降天の唐鞍を明三歳の駒に置き。同じく双の太刀を佩き清平公の長男。愛護の若に勤めさせ神慮をすずしめ奉らば。地玉體長久たるべしとの神勅猶豫に渡らずと。畏れ入つて奏聞あり。地色月卿雲客一同に是は希代の靈夢やと。フシ冠

を傾ふけおはします。地六條の右大將會釋もなく進み出て。御坊は老にほられて筋なき事を言はるゝな。夢は五臟のなす所善惡共に信ずるに足らず。其上山々獄々にて行徳兼備の高僧ども。肝膽を碎きてさへしかゝとなき御勢り。何ぞや俗家の武具馬具にて年端も行かぬ愛護の若。地流鎗馬の曲したればとて如何なる神が愛で給ひ。御清平安なるべきぞ。フシ痛しと嘲笑ふ。調清平笏取直し。粗忽に候右大將。假にも瑞夢とある事を疑ひ給ふは勿體なし。古人の夢を論ずる事真妄邪正虚實あり。菩提心經の如くんば佛天感應の四種あり。蓮華三界日月僧是を四つの善夢といふ。又樓寶藏經の中には佛在世に惡大王あり。夢中に入つての不思議を見る。是を外道に尋ねれば八難の夢遁れ難し。若し寵愛の戸婆夫人を。殺さば其身の禍ひは免がるべしと勧めたり。その時佛聞し召し止んなん。八福輪の吉夢なり。必ず寶を得給はんと夢合せし給ふに。果して翌日隣國より玉の冠を捧げたり。地唐土の帝王も夢を信じて國を保ち。我日の本の天皇も靈夢を感じ給ふ事。書傳に先例候と。フシ理正しく宣へば。調右大將氣色を損じ。よし瑞夢にもせよむね夢にもせよ。手前の行法差置いて餘所にまします神明の。加護を頼むは何事ぞ。抑々山門昔より多くの寺領を當て行ひ。施物を費し敬ふも百王鎮護の靈場と。思つて致す所なり。但し末世に至りては佛法の威も亡び失せ。地祈るに験なきならば山門ありても益もなし。阿闍梨を始め三千の坊主どもを還俗させ。牛飼ひ畜人に使はうかどうぢや。フシどうぢやと睨めつくる。地色阿闍梨涙を拭ひ。詞ア、忌はしや勿體なや。地色非修非學の愚妄人言葉交すも穢るれど。顯密弘通の大乗を誹謗めさるゝ不便さに。あらゝ語り聞かすべし佛法不思議の靈驗は末世にいよいよ盛んなり就中我山は。調圓頓の花止觀の月上見鷲の嶺なれば。本尊の利益他に勝り行者も外に勝れたり。地衆生の諸願無量にして佛智の悲願もまぢく。虚空藏の求聞持にて財寶化徳を成就し。調聖天の浴油には官祿長職速かなり。壽命を祈る閻魔王怨敵退治は大威徳。不動の護摩に掲焉たり金剛般若の利劍には。三毒四魔を切拂ひ五穀成就六慾怨敵七難即滅七福即生。地色八大金剛童子の法如法に祈念する時は。枯れ木再び花開き白骨肉を生ずれども。

悲しきかなや朝廷に。無道の佞人立交り政道邪曲ある故に。王法佛法衰へて本地の利益薄き故。垂迹の神明を祈るが愚僧が誤りか。地別雷山に降臨ある松の尾の明神は。我山におはします大山咋の命とは。同一體の御神にて鳴鶴の神ともいひ。流鏑馬は此神の妙體。因縁故實も知らずして佛法を破却せん。僧徒を還俗せんなどは佛敵朝敵たるべしとフシ憚り。なくぞ申されける。詞右大將腹を立て。ヤア賣僧坊主めぬかすまい。汝は元來清平と親しき所縁ある故に。二條の家の太刀鞍にて御備平癒なされしと。世間の者に言ひなづけ道心を企つる。地朝敵の與黨人彼奴引立てよとのめげば。瀧口に伺候する駿河の前司國則。つゝと寄つて用捨なく小腕取つて引立つるを。それを制せよとの下知を受け清平公の郎等。早苗之介勝重庭上に立上り。詞君を惱ます變化の物。今といふ今見付けたり。猿にもあらず猫にもなく頭はお公家氣は狼。地第六天の魔王組。佛法護持の名僧に敵對をなす眷屬め。射て落さんと大雁股きりくくと引絞れば。詞ア、これく勝重短氣なり。主人持つ身は相互ひ私の宿意なし。佛法話の有難さにお十念を授かろと。地ひよつと爰まで出ましたと手持ち無沙汰に手を合せ。南無阿彌く南無阿彌と狼狽へ廻りほえ廻る。泣き聲鶴に似たりやと。堂上堂下一同に。フシ覺えずどつと笑ひける。地色天皇玉の床近く清平公を召されつゝ。阿闍梨の奏聞先達て朕が感ずる所なり。地別雷山に埒を結び神すゞしめの流鏑馬を。愛護の若に勤めよとの勅詔誠に有難き。家の面目末世の規模神の恵みに叶ひたる。直ぐな心の清平公。邪智貪慾は有雄卿、位倒しの諺は。此時よりぞ三熏始まりける。フシ代々經てや。地君が千年を松の尾の。葉替へぬ色を流鏑馬に神すゞしめて頼むてふ。心の的一二三埒結び廻す外面には。物見好きなる都人押し合ひへし合ひ伸びあがり。見るもことわり今の世の若衆の蕾香ばしき。名さへ顔さへ麗さへ愛護の若は大君の。勅に従ひ陸奥の安達の駒にあらねども。降天の唐鞍置き手綱搔繰りひらりと乗り。オクリ先づ下へ地をぞ乗り給ふ。フシ抑も馬に七箇の秘事三箇の手綱五箇の鞍。陰陽の鞭朝嵐大嵐小嵐。運びのべ足。フシ千鳥足。霞流しと。地云ふ曲をしつと、打つて乗り返し。乗廻しては引返す響の。コハリ音はちりりんり

ん。障泥あしひの音はどう／＼と／＼とく／＼と。ナホス地くるりと輪乗りして。障泥あしひをはたと打つ程に、フシ四足を宙ちやうに駈出す。地色馬上ちしよくばうじやうに番つがふ白羽しろはの矢やかの養由やうゆうが柳やなぎ的てき的てき。三度の目め當あ違ちがひなく當あつて／＼當あつてと。貴賤きでん上下一じやうげ一同いつどうにフシいや／＼どつどぞ褒ほめにける。地色然ちしよくる折節せつせついとやごとなき上じやう藤ふじを。後達ごたつお婢めかけ肩かたにかけ埒あ開ひらき駈入かりて。局つばと見えしがはしたなく。詞ことばコレ／＼若衆わかしゅ動きやんな。的てきのそれ矢やが姫君ひめぎみのお腹はらに立つてお目が眩まふ。地價ちげんや／＼と呼よび猛たげる警固けいこの者ものども打笑うちわらひ。推おし察さつなる言分ことばかな。御神事ごじんじ的てき先まへへのさばり出でたが不調ふてう法ぽう。死しなば死しに損そん構かまはぬと地叱ちひり付つくれどたじろかず。詞ことばイヤ／＼さうは云いはせまい。主しゅと頼たのんだ姫君ひめぎみの嫁入よめいり前まへに乳ちの下したへ。穴あなあけられて是こゝがまあ堪た忍しのがならうかと。地恨ちがみむもげにと白羽しろはの矢や胸むね苦くるしげなる有あ様さまに。若君馬わきみより下くだり立たつてする／＼と走はり寄より。不慮ふりょな事こととは云いひながら扱あいとほしのお姿すがたと。詞ことばの花の色はないろに香かに風かぜが持もて來こる。懷なごの。内うち擦こる手ては逆さか餘まの雫しずくよ物の初はじめぞよ。スエテ締しめつ緩ゆるめつ姫君ひめぎみは。流ながし初はめたる目めの内うちも。戀こひにおぼこの若君わきみは何なにと答こたへも夏なつ黄わう檀だんの。照て葉はと顔かほを打う赫あかめ。フシ氣きの毒どくらしき折節せつせつに。地色ちしよく是こゝも變からぬ上じやう藤ふじを女房にようぼう達たちは肩かたにかけ。つか／＼と立た寄よつて。詞ことば妻つまがお主しゅはおの様さまのお手てにかゝつてお命いのちも。地今ちいまを限かぎりになり給たまふ様さま子は斯ごとくと白羽しろはの矢や。肌はくつろげて見みせければ若君わきみ呆あれ給たまひつゝ。神かみの咎とがめか二人ふに迄いた思おもはぬ憂うれ目め見みる事ことと。差さ入れ給たまふ左ひだりの手て押お戴さいて締しめて。氣遣きぢひさするもお笑わら止とまそれ矢やと云いうたは偽いつはりり事こと。戀こひのそめ羽はの色いろに出でて思おもひ込こんだる一念いつげんの。石いしに立たつ矢やの例たとをば。知しられまほしきばかりにと、フシ纏まとれかゝるや。左ひだり右みぎいづれを花はなと櫻さくらとも。水みづ淺あ黄わうなる愛護あいごの若指わかしゅさし唾つばへたき氣色けしきなり。地色ちしよく先まへに來きりし女房にようぼう達たち與よさめ顔かほに打う守まる。中なかにも局つば聲こゑを上げ。詞ことばナウをこな大騙おほまか。こちの趣向しゆかうをなせ盗ぬすみやる。折角たく工たくみ拵しへて射やて落おしたる寢鳥ねどりをば。地綱ぢこう掛かけうとは大膽おほだんなあたいやらしいとわめけども。こちらも負まけぬ女口にめぐち。詞ことばハ、／＼味あじな事ことを聞きく。趣向しゆかうは似にても違ちがふとも兎角うまが勝負しやうぶ負まは早いはやが勝かち。地戀ぢこひの矢疵やぢの時とき花はな醫い者しや其許そのこゝ迄いたは手てが廻まらぬ。杉山すぎやま膏かう藥やく買かひはしやれとどつと笑わらへば右みぎに立たつ。姫君ひめぎみ少すこしせき心こゝろ。詞ことば君きみが心こゝろは知らねども情なさけはこちが一的いつてき的てき。地ちあれ／＼あそこな幕まくらの内腰うちこし元もとどもを屏風びやうぶにして。つい物陰ものかげにつま

こもる矢野の神山匂ひ初め。見初め寝初めて解け初めて。ちよつと／＼と手を引いて誘ひ給へばこちらにも。むつとせられて引戻し戀は互と先から。了簡すればまんがちな。斯うした首尾は優曇華の咄する間もあるものを。せはしないやらはしたない其處退かんせと突放す。詞イヤ小癪なるお上臈。わしが男をわしがてにどうしようと構やんな。びろ／＼しやるそなたは誰そ。ア、とつくと聞いて置かしやんせ。權大納言爲道が乙の娘に鳩照姫。地愛護様とは似合ひし女夫の中と思し召せ。詞ム、そなたが公家の姫なれば自らも右大將。有雄が娘に六條姫。地氏も系圖も若君の御臺と云うて不足はない。イヤ／＼わしが嫁入する。おれが殿御に持つて見しよ。ならぬ。させぬと兩方へ引張り合うた衣手の。もりて浮名は立たば立てこなたへ。イ、ヤこちらへと互に募る女の意地。若君は持てあぐみ早苗之介は居やらぬか。荒木の左衛門／＼と。呼ばひ給へば兩人ははつとばかりに走り出で。フシ先づ双方へ押分けて。詞様子はあれにて承る大殿へ披露して。表向より婚禮の儀式を調へ候べし。地先づ／＼御歸り遊ばせと宥め賺せば姫達も。流石は人目恥かしくそんなら今日は歸ります。詞早苗之介殿頼むぞや。愛護様をば鳩照が夫に持たして下されや。地いかに／＼勝重が肩持つて添はしましよ。詞コレ荒木殿構へて六條姫が嫁入るぞや。地成程々々左衛門が御取持ちを致すると。當座遁れの請合も空頼めしてにこ／＼と。互にめなし男なし廣八丁に何時なると。大浦波立歸り見れども飽かぬ山梨の。花の姿も隠れ行く首尾こそよしと兩人は。若君の御供し。オクリ心へ靜かに立歸るフシ然る折節。向ふより頭の辨成重卿勅使とあつて入り來り人々に一禮し。詞流鏑馬首尾よく執行ひ神明擁護あるにより。御惱ぬち快然たり。地色報賽の御爲に神田神領御寄附あり。愛護の若も今日よりは中將に任ずるとの。宣旨の趣き相述べ御宸筆の願文を。若君に差出せばつと頂戴なされつゝ。社の方に差向ひ柏手再拜懇ろに。高らかにこそ讀みあげける

願書の巻

地それ秋津島は神慮擁護の靈地たり。かるが故に上一人より下萬民に至る迄。佛神を深く尊むなり。就中當社松尾明神は帝都不變の守護神たり。豈納受なからんや。然るに天皇闕らずも。寒暑の難に恙を生じ。醫陰の兩道術盡きて諸佛の悲願空しきを。神明和光の力により。平復ならせ給ふ故。社頭造營仕る。地先づ五十餘町に地を引かせ。宮殿樓閣閑やかに。瑪瑙の行桁玻璃の柱。黄金の闕を延べ開き。瑠璃の高欄やり渡し。碑礫の擬寶珠磨き立て玉の蓮臺錦の御帳。渚の砂に黄金を交ぜ壁には七寶。池には玉の橋をかけ。忌垣はかうやうらんけいし。廻廊。拜殿式の文金剛露罎を移すべし。棟梁の棟をうきやかに。無量の瓔珞結び下げ。華鬘の幘は雲を分け。常樂我淨の。謠風吹かば胸の蓮空に開き。蘭麝の匂ひ四方に満ち。無明の。眠り覺めぬべし。地香の煙諸經の聲。二六時中に絶間なく。綾の幣出白銀の獅子狛犬。階は唐木を以つて作らすべし。大塔鐘樓堂いかにも高く。雲の上に光を放つて作らせ四季の祭禮怠らず。珊瑚琥珀甕を延べ。九品の鳥居石の塔。金剛界の曼陀羅。胎藏界の曼陀羅。鍔腹卷太刀刀。唐土天竺我朝。三國の寶の數。寶殿に納むべし。仰も神と申すは眞俗たるを姿とし。正直たるを心とす和光。同慶地曇りなく異賊を千里に。退け早く素懷を遂げしめ給へ。南無歸命頂禮。敬つて申す寶龜三年五月十五日。二條の中將愛護の若と。高らかに讀み納め悦び。勇み歸らるゝ。フシ神道兩部。習合の道の。道たる奥旨をば。見る人聞く人押並べて感ぜぬ者こそなかりけれ。

第

二

地兩雄必ず争ふと先哲是を評論せり。地色右大將有雄卿禁裡に於て争論の鬱憤更に晴れやらす家臣駿河の前司國則。其外一家の諸侍膝元近く招寄せ。詞此度帝御惱につき典藥は醫術を盡し。諸寺の名徳家々の秘密を以つて加持するに。更に験のなき所を比叡山の阿闍梨めが。作り靈夢の滅多的まくり當りに玉體は。地忽ち平安なりし故二條の家は

日を追うて。威を一天に輝かし我が六條家は年々としごとに。衰へ行くは知れた事。ステテ無念と。云ふも餘りあり。調取分け先帝第一の御子某が妹腹。村雲の皇子こそ天下を保たせ給ふべきを。行跡悪しまじとさみしつゝ當今第二の御子。春宮に立つる由は清平めが業ならずや。地彼といひ是といひ最早堪忍なり難し。天下の諸武士を相語らひ左大臣を打滅ほし。當今春宮追ひおろし一の王子を位にそなへ。某攝政關白と尊まれんと思ひ立ち。當時諸國の大名には先づ何れをか頼むべき。而々所存を残すなと大きにせいて怒らるれば。あり合ふ者ども口を揃へさて〳〵目出度き御企て。御家の繁榮此時と。フシ悦び合ふこそ愚かなれ。地國則一人最前より肩を擧め居たりしが。くつくと笑ひ出し。調扱も扱も輕々かろくしく淺はかなりしお心や。大事を思し立つならば天下の大名小名が日頃の行作に心を付け。彼奴は不忠に與せぬ者彼は味方につく者と。とつくと心底見届けて仰せ合はされ候はじ。事も成就致すべき諸武士の所存も辨へず。只軍勢の多少のみ。選ばせ給ひうか〳〵と廻文を持ちかけなば。遂には此事露顯し叛逆の名を取つて。お家の滅亡近きにあり總じて軍の肝要は。調居ながら遠きを鑑みて戦はずして勝利を得る。是良將の成す所。此度の御大事憚りながら國則めにお任せ候べし。屈竟の智略あり。此左大臣清平公。北の方死去の後まだ縁組の沙汰もなし。扱もお家の姫君様愛護の若の御器量に。首だけのぼつておはします。そこをば態と引違へ清平殿を掣に取り。お輿を入れられ候はば。地外に色ある御身といひ。年寄り男を嫌ふといひ新枕からそぶ〳〵と。地色睦まじからぬ夫婦合そこを見付けて姫君を。瞞し賺して人知れず扱も扱も奪取らん。調元來天子御預りのお寶なれば早速に。御咎めあらんは必定なり。其時節には姫君も此方へ取戻し。逆臣なりと讒奏せば仕合せようて遠島か。大方お首はないものよ。地然る時には天が下只取る山の時鳥。繁れ松山御家のフシ繁昌ならんと申しける。調右大將冠を振り。汝が智謀の一通り道理無きにはあらねども。不相應なる縁組を呑込む様なうつけてなし。何故かゝる工ぞと咎められては毛を吹いて。疵を求むる道理ぞと。云はせも果てず差寄つて。それ猶易き謀。清平公と殿様の互の威勢争ひは。遂には國の亂れぞと天子も兼

ねて是のみに宸襟を御惱まし候由。前非を悔いて今日より意趣を含まぬ誓約に。宣旨を請うて清平を聲に取り度く候と。地色奏聞あらば忽ちに勅諭下るは知れた事。何程心に落ちずとも否とはよもや申さじと。フシ手に取る様に言ひければ。地色跡先知らぬ智慧なしども是ぞ誠に上品の。上智と云うたものならん扱申されたり申したり。文殊様よと雖すにぞ附いて乗つたる右大將。ヲ、尤もぢや呑込んだ。直ぐに只今奏聞せん善は急げぢや今日中に。姫は送らん與乗物介添宰領塗長物。嫁入は親の謀帝も一杯清平も。一杯喰はす喰はずとて。孫など見せてくれるなど笑ひて。御殿に三重へあがりけるフシ勅なれば。曆も入らず相性も。老も厭はず年若な妻迎へ舟壽に。一家一門上下を清平公の御館は。石を打つやら謠ふやらフシざいめき渡るぞ厭はしき。地色愛護の若も親と子の祝儀の衣裳改めて。やうく御前に出て給ふ。荒木の左衛門近國若君のお傍に寄り。詞あれに渡らせ給ふこそ只今よりの御母君。先御臺様御同意に御孝行ましませと。地申す内にも涙ぐみ。哀れ變れる世の中と。スエテ差俯いてぞ居たりける。地色乳人は臆て心得て御土器をば持ちければ。御末の女房銚子取り。オクリ御酌にへ立つて汲みながす。フシ手に觸れながら。若君は。物思はしき風情にて。物憂き我が身の上や母といふ名は變らねど。生さぬ仲には昔よりさがなき例あるものを。恨めしの父上や元の母様戀しやと。受持ち給ふ御盃干しも得やらてしをくと。心迄來る憂き涙止め兼ねさせ給ひける。地六條姫は戀草の枯るゝとなしに逢ふ事を。いつかくと松の尾の。神の咎めか梓弓。引違へたる嫁入も心の駒は變らぬを。スエテ君ならずして下紐は。解かじと心誓文を。立て、語つて知らせと。人目の關の輕さげにうろくとした目の中を。地左衛門ハツト氣が付いて真中へずつと出て。詞サア若君様お盡をば早う御戻しなされませ。此お盃濟むとはやあなたは母御お前はお子。どう判がしても判つても。親子のお名は消えぬぞや。然るによつて親子といふ眞實ぞつこん生えぬいた。地親子ぢや〜親子ぢやと心を据ゑて御座れやと。あちらを見たりこちらを見。遠いからくる意見口フシ家老の役もむつかしき。地色若君は打領き盃飲んで下に置き。詞悪い事あら幾重にもお叱りあつて給は

れと。地こちらはほんの母様氣。姫の心は妹脊の中に巡れる御土器。是二世迄の約束と心一つに楽しみて。笑の内なる劍羽や鴛鴦の衾も敷き忍ぶ。奥の間深く入り給へば。若君御禮をさまりて。オクリ御館にへ歸らせ給ひけり。フシかゝる折節。地色老の白髪もすべらかし祝儀に持てる鳥臺の。姥より年は高砂のおのれと屈む腰付も。感懃めいてのしものと。清平公の御前に献上物を差置いて。詞さてくくく御目出度や。さぞお嬉しう思し召そ。折節悴早苗之介此頃瘡がおこりまし。飯汁もろくに食べぬ故婆様苦勞にあろけれど。名代に往て下されと頼むを厭とも申されず。聾になつて廿年闊より外へ出ぬ婆が。只今爰へ来ればこそ御無事様なる御顔を見て。地冥途の土産に致します。ア、南無阿彌陀くんと念佛唱へ。フシ敬まひける。地色清平御機嫌麗しく。早苗之介は常の事久々にて對面し。満足なりと宣へば。左衛門耳に口を寄せ。詞コレ大儀にようこそ參つたと。拙者へ仰せ渡された。ヤアく。鯛を振舞へとこなたに仰せ渡されたか。ヲ、食べませうく。七十三になりますますが鯛の頭もやりますと。フシ取つてもつかぬ挨拶なり。地清平重ねて宣ふ様。詞コレヤ左衛門。聾が祝儀の鳥臺は松を赤葉に染めなして。鶴かと思れば鳩を置き尉の代りに冠を乗せ。姥にはあらで振袖の女が麻笥に打凭れ。地色鬘斗の如くに信濃麻を束ねて臺に据ゑたるは。所存こそ有りつん。フシ尋ねて見よと宣へば。地左衛門きよつとしたりしが。さあらぬ體に打笑ひ。詞取り所なきかな聾に尋ぬる迄も候はず。早苗之介が物好をつくく。察し候に。常磐の色は古めきて。赤松わつたなんどとは無病人を譬へたり。冠を乗せしは殿様の御壽命尉に等しきと。祝うての事ならん。姥の代りに御臺様御夫婦合は塗桶の。丸い様にと願うた物。鳩は三枝の禮儀を見せ麻の内なる蓬迄。直なる故事も候と似つかはしくも取成して。地聾が鹿相や云はんかと。近付き寄つてコレ婆様。地色お次で休息遊ばせと手を取つて引立つれば。詞ム、婆に一差舞舞へとか。兎も角も致さうが。心を盡くした鳥臺に篤くと御目がとまらぬや。地お尋ねにもあづからず。長生きしたる其甲斐には。是迄世間の善悪を見渡つて來ましたが。詞此度の御祝言二條の家の御滅亡。榮えし松も枯葉して荒れたる庭の閑子鳥。

年寄り來いと呼ぶなれど若い女は厭がりて。お宮仕への留守事にてつきり眞字を積みかけん。地麻の狭衣薄くのみ染めて止むべき色かはと。フシ詞の端のうるさきに。左衛門そつと後から。太股抓ればアイタシコ。詞こりや年寄りに濡れるのか。但し云ふなと止めるのか。婆にいきすぢ張らせずと御家老役に先達つて。なぜ御意見はさつしやれぬ。いとしやこちの嫁御察になんの落度もなければども。血腰の抜けたこなたをば兄に持つたが因果にて。早苗之介は去つたぞや。地それでも合點が行きませぬか。不吉の見えた御祝言凶會日なり申の日なり。お輿の入つたも申の時。去るといふには手が付かぬ今宵の内に去らしやれと。老の唇そり立て、フシ齒に衣着せず云ひ散らす。地色清平呆れ給ひつゝ。なに早苗之介が女房を。去つたと云ふは實正か。詞左衛門ハツト畏り。さん候此夕仔細もいはず妹めを。去つて戻し候へども。御婚禮に取交せて不吉なる儀を御耳へ。入れ申す儀を憚りて隠密致し候と。地申し上ぐれば清平公御氣色大きに損ぜられ。詞短慮至極の男めかな某五十に追つかゝり。色に迷うて勅諭を有難いとも嬉しいとも。思うてうか／＼暮さうか。國家の大事身の大事深き思案のある事を。辨へなしの諫言だて。聲が聲の高ければ部屋にも聞かん附隨が。里へ歸りて告げたらば忽ち事の破れなり。詞不便には思へども右大將への言譯に。早苗之介め勘當する明日中に親子共。地屋敷の内を追出せと常は溫和の清平公。フシ以ての外の御機嫌なり。地荒木は呆れ聲さへ何聞いてやらきよろ／＼と。鰻卵に地黄丸。お物入ぢやと會釋してすご／＼我家に三重へ歸りけり。地忠臣の種は心に蒔きながら。植付けならぬ早苗之介空五月雨の時ならぬ。勘氣を受けて追立ての使三度に及べども。門戸を締めて追返し。討つて來らば潔う親子一所に死覺悟。小高き所に座を組みて。ステテ暇の盃汲み交し。詞コレ母者人此脇差を突立て。左へ廻すを合圖にて首打つて給はれと。地仕方で見すれば二三度も。頷くばかりを答にて。云はず語らずわろびれず。フシ聲もいつそ取得なり。地色かゝる所へ荒木の左衛門近國。駿河の前司國則大勢を引具して。門荒らかに打叩く。詞勝重上より聲をかけ。フ、早苗之助是にゐる。問ふ迄もなく切腹の御使者なりと推量した。左衛門一人來

られても早速事の濟むことを。いつぞや禁裡で出會せた變化仲間の鶴侍。地色檢使などと云ふ事が穰らはしい汝等に。武士の切腹見すべきか罷り歸れと睨め付くる。國則大きに腹を立て。詞ヤイ宿なしの素浪人。佇り所のなきまに自業自滅の切腹を。檢使とあつて來りしはおのれが末期の面目なり。地四の五の云うて隙取れば踏付けて首打つが。どうぢや〜と責め付ける。勝重かつら〜と笑ひ。詞夏豆腐の食らはれぬ六條殿の御家來。國則とやら青のりとやらとろゝな事を置いてくれ。歸れといふにへちまうて去なねば例の雁股と。地弓と矢取つて打番へば。アレ死狂ひのあばれ者。門蹴破つて討取れと侍どもに下知するを。左衛門暫しと押留め。詞やあら聞えぬ前司殿。上意を請けし某が未だ手出しも致さぬ内。貴殿に先の越されては拙者が分はどこで立つ。地色貴殿の切つて立てうかと。刀の柄に手をかくればア、御免誤つた。二條殿の御家來は。どれとも御氣が。地短いとフシ輕薄云うて押退る。地左衛門は聲を上げ早苗之介も見苦しい。地此場に至つてさしてなき相手取るは何事ぞ。お主が持病の短氣をば一言の妙藥で。一療治して見やう。心を鎮めてよつく聞け。例へば上手が碁を打つに。一手をおろすも大切に稍暫し案ずるを。下手が側からもとかしがり助言を云ふは差當る。善悪ばかりに目が付いて一番の碁の勝負けは。地色上手に及ばん如くにて理非明らかな御主人の。遠い所を鑑みてなさるゝ事は其方や。某などが眼にはなか〜以つて及びなし。六條殿への言譯とお主を勘當なさるゝも。御所存あつての事ならん。主人にすねるは身の誤り奥山家へも引込んで命全う立歸り又奉公せい勝重と。言ひ宥むれど頭を振り。詞イヤ早苗之介が一命は諫めを入れし島臺に。差出して置きたれば蟬の蛻の此身體。どんな藥を用ゐても本復はなり難い。疊の上で舟を漕ぎ穴藏で。雷聞く。地用心深う養生も全うなさるゝ御自分は。武内の大臣の年になる迄長生きして。二條の家は野原となり。鹿の臥所となるを見て袖絞らるゝ有様を。伍子胥が忠義の眼を借り見て笑ふぞ左衛門殿。詞ヤレ愚かなる事云ふな。死は一心の私にて始終の功を立て難し。伯夷叔齊取るに足らず。イヤ勝重は往古の管仲が智は持たぬ。コリヤ忠義に古今の隔てはない。ハテくどい事止

まらぬと。地詞戦ひする所に妻の常世は鍬の柄に。簀と笠とを引掛けて。馬に白泡はませつゝ一文字に馳せ来り。殿様よりの上意がある。兄様そこをお開きと門外に立寄れば。國則聲を荒らげて。詞ヤアこれゝ常世。上意にもせよ何にもあれ。早苗之介が女房よ去られた縁者の證據。不遠慮千萬退きやれ。ム、異な事をお咎めある。そなたは先度内裏にてとこぼえられしと承る。國則といふ侍ちやの。地常の女と思やつたら當の繩が違ひませう。母が力を産み付けて右の腕に三人力。左の手にも二人力大雁股は持たねども。捻り殺すが合點か。詞ア、待つたゝ。或程こなたの大力は先達つて承る。地賞翫致すに及ばぬとフシ押退るこそ笑止なれ。詞地色ヲ、ちつと左様でござんしよと。軒端に鍬を打掛けて。門の上に這ひ上るを。勝軍見るよりコリヤゝ女め。詞某いかになるとまゝ跡り残りにて若君の。御先途を見立てよと頼んだ一言はや忘れて。去られた男の門内へ入らんとあがくは推參なり。地色おのれ其臚一寸でも。おろすと否や切折ると。太刀の鐔元抜きかくれば。常世はわつと泣き出し。餘りと云へばむごたらしい。其言分はどうぞいの。尤も暇は取つたれども今はの際の夫の顔。いとし可愛と昨日迄まつはし給ふ姑の。お聲も一度聞きたさに。義理も人目も恥辱をも。打忘れたが誤りか。是が身も世もあたりよかと口説き。フシ立てゝぞ泣き叫ぶ。地色聲や心や通ひけん老母は顔を振上げて。詞ヤレナウ嫁御ござつたか。老を養ふ孝行の何かの禮も云はずして。地死ぬるが心に懸かつたにようこそは来て下さつた。嫁御ゝと手を上ぐれば。常世も兩手を差下し。互に手を取り撫て擦りお前は嫁と宣へども。わしは義理故母様とも姑御とも得云はずに。跡に残るか悲しやとフシ恨み。啣つぞ道理なる。地色岩木にあらぬ早苗之介フシ共に涙にくれけるが。地稍あつてコリヤ常世。詞我君よりの御使とは何事なりと尋ねれば。誠に歎きに取紛れたと忘れて居りました。清平公の仰せには。勸當をせし者どもが知るべと云ふはそちばかり跡見苦しうなき様に。地色取賄へと宣ひて。身體を隠す簀と笠あたりを清むる鍬迄を。フシお心附けられ候ぞや。これ御覽せと差出せば。勝軍ハツと押戴き。詞お主の慈悲は末々迄。斯く有難きものなるよな。コレ

御覽あれ左衛門殿。冥途の旅の御餞御主人よりも拜領した。地色浮世の妄執嗜れ切つたり。お暇申すといふよりはや腹を切らんとする所を。左衛門苛つて。ヤア死なれぬ〜早苗之介。詞此度の御褒美に國と知行を大分に。拜領しながら死なうとは。ムウ何と云ふ左衛門。鍬一挺に籠と笠外に何にも拜領せぬ。ハア愚かなり〜。國も知行も日本もひん丸めたる竹の子笠。地色籠打ちかぶり行く時は山河草木悉く。望み次第に汝が物。水に望んで魚を釣り春の山田を掘返す。鍬一挺に萬石の知行は年々身に備はる。それでも拜領致さぬとは。詞勝重横手を丁と打ち。最前食べたお薬の験が只今顯れた。清平公より改めて知行田畠拜領し。地御眞實なる御所存を盡り知られた年貢米。實るを待つて早苗之介。名をも形も隠家に土百姓の助三郎。大小入らぬと投げ捨つれば。常世は門より飛んでおり。オクリ籠取り着せて笠の緒も。フシ締めて寝る夜は。なけれども死別れより生別れ。巡り逢ふ日を樂しみに暇の狀が氣に懸かる。爰てさらりと引裂いて。もうこちの人往かしやるか。詞ム、女房ども無事で居よ。兎角命が芋種ぢや。地麩て戻つて子種をば蒔いてやらうと差合も。聞かぬ老母の手を引いて門戸くわらりと押開けば。國則向ふに立塞がり。詞やあ待て待てどこへ行く。いつぞやと云ひ今と云ひよくも矢先を向けしよな。堪忍ならぬ太刀先で勝負をせよと極付くる。詞勝重につこと打笑ひ。土民に下つた某と見侮つての言分な。面白い〜。在所喧嘩の手習ひに小鍛冶が打つた鍬がまぢ。いざ參らうと振上ぐれば詞には似ず飛退り。詞こちが習うた兵法に。鍬と斬合ひ不得手など。地云ふをば機會に指して行く。道は一筋善惡の二つの中を踏分ける。荒木が智慧は吳子孫子。節義は專諸田横にちつとも負けぬ勝重が。心に望みある時は短氣起すな端喧嘩すな。韓信が股女房の股。抜けて潜つて逢坂の關の。そなたへ差して行く心は古今類ひなき。夫も粹兄貴も粹。女房は粹の骨頂と聞く者。感じ合ひにけり。

地遊女の袖吹き返す飛鳥風。誰が徒らに産みつけし。情の知るべ手を入れて。水の月取る鳩照姫。長地女の意地の強弓に的持ちかくる切穴のあな卯の花の楹取に。スエテ羅綾の下着錦緋の。打掛小袖しどけなく馴れぬ徒路の介錯に。お婢局壺裝束。奴に振らす長刀の鞘の中山命とは。それも戀路かいとしのか愛護の若の御館を。前渡りしてあちこちと。オクリ合圖のへ言葉咳拂ひ。フシ風が知らせて。おとづれて。裏門そろりと押開き。内より常世走り出て待兼ねて居りましたに。ようこそ御出て遊ばした扱まあ今宵の御日待。いつくよりも賑はしくお座敷から勝手迄。藝者どもが居流れて御隠し申す所がない。斯うあらうかと思うた故。御長櫃をお持たせと言ひ遣はしたは爰の事。詞あの中へ忍ばせまし藝者の衣裳と思ふなら。地色誰が見咎めも致すまいよい首尾を見てずつと出し。本望を遂げさしましよ。御窮屈なは暫しの内如何あらんと伺へば。姫君は打笑みて戀さへ叶ふ事ならば。何の苦勞な事あると恥かしさうに顔隠し。姿も隠す長櫃のふためき渡り押入れて。御供の内て鬚のない奴殿これ昇かつしやれ。お局方はお歸りと戀のすれ者手引して。契りの末は長持を。オクリ館のへ内へ昇ぎ入るゝ日待は公家も。町方も。同じ格なるはて遊び。琵琶琴止めて三味線も胡弓に移り尺八の。戀慕流しに氣が減入りや。又引立てる流行歌節音曲は外面に洩れてへ面白きフシ既に更け行く。地色半夜の鐘朔日頃の眞の闇。星の如くに高提灯燦爛としてお館の。廻り四五町取圍み清平御臺に引添うて。荒木の左衛門駈來り門外にて大音上げ。詞御寶藏を切抜いて若君様へ御預けの。御鞍御太刀を盗み取る。徒者の御詮議に。大殿是迄御出てなり若君の御館へ。日待に召されし藝者ども罷り出て面々が。身の言ひ晴れを仕れ出ようと呼はれば。地打驚いて愛護の若常世も出て共吟味。日待の興も覺め果てゝ三味線胡弓打折られ。わめく聲又詫びる聲。燭臺こけて猪口皿は。オクリ我も。我もと。フシ走り出て。地色杖にはぐれし座頭の坊滅多無性の家鴨飛び。殿を後に畏る。詞こりやくこちら向きませい。シテ名は何といふ何處の者。ハアお差合ひかは知らねども夜晝なしの城達。今からお目をかけ値なし三井の貸家ををりまする。地色次に蹲ぶ若男名乗りもさすが恥かしの。もりしと中

言はしやる。ヤア諍あやまふまい。御家の重寶太刀御鞍おのれが盗んで此櫃へ。入れ置いたに紛れがない。眞直ぐに白状せい。ナウ左衛門殿。人にこそよれ左様なる悪名を付けられては早苗之介が身分迄異なるものになります。達つて無禮を仰つしやれば。兄とは云はさぬ許さぬぞや。はれやれおのれは狼狽者。女なれども是程の了簡はは早つく筈ぢや。大殿様や左衛門が詮議は盜賊一通り。御臺所の御吟味は筋が違つて紛ららしい。地色大切な儀が重なる程若君様の難儀といひ。他門へ歎きをかける事そこをとつくと合點して。おのれが盗んだ鞍太刀が箱にあらうとあるまいと。盜賊の詮議さへ濟めば此場が無事に濟む。盗みましたと名乗つて出て若君様の御爲に。死ぬる命は夫のため早苗之助が聞いたりとも。憎い奴とは思ふまい。地色嬉しからうと目で教へて教へ身をもがけば。常世もやうく合點して

暫し思案し云ふ様は。詞兄様何とも吞込まぬ。御臺様の御手前は尤もそれにて濟みませう。御太刀や鞍の御詮議が又此櫃にかゝらうと。地色言はせも果てず清平公。詞左衛門家老程あつて詮議の仕様が面白い。ヲ、出来したよ。某所存ある間其長持に封をせい。地畏つたと立寄つて早繩切つて肘壺を。男結びにしつかと締め。直ぐに妹を取つて

伏せ。フシ高小手こてに縛むむる。地色清平公もずつと立ち家來が腰の捕繩を。御自身持つて若君を縛めんとし給へば。御臺所は走り寄りなう情なや胴慾どくよくや。許させ給へと取付いて歎き給ふを突放し。詞間もない親子の仲でさへ左程に可愛う思ふもの。地色誠の父が不便さは胸も五體も裂くれども。宮仕へする悲しさは。詞第一は先づ天下の爲。第二番には先祖の爲。第三番には不義者と。他人他門に笑はせぬ。地色慈悲が餘つてかける繩なやせん邪見な親と思ふなど。涙ながらに縛めの。フシ繩も血筋に染めぬべし。地色サア侍ども此若を部屋やまの柱に釣上げい。側には人は叶はぬぞ禁裡とらひの宿直相勤め。立歸つて詮議せん近國常世を明日迄。其方に預くるぞ連歸つて吟味せい。幸ひながら左衛門よ。愛護の若も妹も襪の中なる御寶も。三方首尾のよい様に。どうぞ思案をくと跡は。涙ぞ三重知らせなる。フシ露の身の。消えども消えぬ置き所。草葉の外に袖袂。かゝる浮名に愛護の若。身に覺えなき唐鞍からくらや。ステテ双の太刀を失ひし。科を

負うてふ杉柱。本フシ父のつらさに猶忍ぶ。過ぎ行き給ふ母上の。此世にまします其時は。鴛鴦の衾の中にさへ我を疑させて引寄せて。ステテ搦撫てられしも何時しかに。今咲く花に色見えて。フシうつろひ易き人心。地色親しき事の例には親一人子一人と。言うて語つて慰むに。いかなる事のあればとて斯くまで強き縛めの。蜘蛛手にかゝる玉の緒も絶えなば絶えね厭はねど。草の陰なる母上の。迷ひ給はん悲しやと。降る甲斐もなき松が根をフシ波に現はす涙なり。地小夜衣わが夫ならぬ夫さへも。宿直の留守と一人寝の。蚊帳の内は籠の鳥。下焦れなる泣き寝入り。夜着の下より一念の。魂はつと燃え出でて空行く星かへ天の河フシ渡しも果てぬ。鶴の走るともなく庭もせの。落つると見えしが忽ちに御臺の姿すつくと立ち。世に嬉しげに若君のお傍へ走り寄り給ふ。時に不思議や是も亦同じ閨路の長櫃より。地一つの魂飛び出でて。中に隔たり追戻し。慕ひ巡ると見えけるが。姿を假の鳩照姫立並んだる顔と顔。互に突退け押隔て睨み合ひ又怒り合ひ。ステテ恨めしげなる。聲を上げ。なう淺ましの心やなう。江戸地縁定めて夫持ちて。伏屋に生ふる常木の。其名をいかにせんとてか。道なき戀の柵を。命にかけてフシ仇波の。地色立返らずばいとほしき。我戀夫も世の中の人には葛の松原と。笑はす事の腹立ちや。フシふつ／＼思ひ切り給へ。詞ナニ思ひ切れとは誰が事ぞ。地色我こそ先に三島江の玉江の眞菰かり初めに。定めし夫は夫ならず。子も子にあらで我が夫と。地思ひ詰めにし心の底。千代は經るとも變らじの常磐の山の岩躑躅。いはねばこそあれ戀しき物を戀ひ／＼て。待見る甲斐もフシなよ竹の。徒らふしの。明けぬ間に。地色我故見する愛目の繩。解いてほどいて打解けて語り盡くさん陸言に。ステテ嬉し涙も紅の。目の中瞞つて聲震ひそれなる女。フシ歸れとこそ。地色浮巢の鴛鴦の鳩照姫。妬ましの詞やとフシ齒の根を。鳴らし身震ひし。片羽思ひに夜もすがら。戀しき人は水の江の其浦島が箱ならで。あけて悔しき自らに憂目見せんと計ひし。憎やさかなやはしたなや。いで／＼恨みを晴らさんと誓を取ればこなたも取つて結ばほれたる糸薄。亂れ／＼てゆら／＼。ゆられ／＼て突放され左右へかつばと伏轉び。コハリ又起上つて追懸け。追懸け

追詰められて追返し。胸と胸とに富士と駿河の煙くらべや。思ひ較ぶる女の一念。負けじ。劣らじいとし可愛の俤
 は。ナホス地あれくあそこに嬉しやとて。走り爪立て立ちかゝり。此縛めは結ぶの神の御注連繩。喰ひ切り引切り抱
 き下して背中をり擦り。手足を撫てたり花の姿をつれく守れば。罪も報いも嫉妬も仇も。忘れて果てて面白や。
 カハリニ上り祭文辛苦しやるか顔の瘦せ。初手の悟氣は。どこへやら。今は二人が理に落ちて合ヨ、ヲ、ヨヲ、イサヨヲ、い
 つそ泣こより外はなし。合待てば甘露の日傘差しかけし。身もいつしかに。オクリ沈み。果てにし。ヨ、イサ ヨナホスフシ身
 の上も。君故ならば。憎からじつまし隠らば唐土の。吉野の山の。山のとろくの又其奥へも。附添ひ引添ひ離れはや
 らじと兩手を取つて。我こそ行かん。イヤく此身と彼方へ此方へ引合ひ捻合ひ。力車のくるくく。くるりく
 と入り違へ。いづれ千引の石の身と。動く氣色も難ければ。地妹背の仲は今宵には。降らぬものと寝に歸る。コハリ何
 時迄草のいつまでも。嫉妬は恨み盡くされじ。忘るな忘れじ二世に。三世と闇夜の雨の。形見に通ふ朝の雲。消えて
 も残る濡衣の恨みも二つ三つ五つ。七つの鐘に夢覺めて。ナホス地さらばの聲や松の風。佛消えて愛護の若忙然として
 三重おはしますフシかゝる所に。地色常世は兄の計らひにて細目許され甞來り。若君を見るよりもなう嬉しやなさり
 ながら。詞大殿縛め給ひしを誰が許して其上に。地御臺所の寢間前に佇み給ふは訝しと。問詰められて若君は。隠す
 に詞あらばこそあらまし語り給ふにぞ。常世ははつと涙ぐみ扱々是非なき世の中や。詞兄左衛門と言合せ急いで落し
 參らせて。御詮議あらば私が御爲に死ぬる覺悟にて。地色只今來り候へども執念深い御臺様。共に屋敷を忍び出て御
 前のまします先々へ。附添ひ給はゞ世間から浮名も立てう親子御の。お顔も再び合はされず私とても犬死を。致さん
 事の口惜しき御器量勝れ給ふのが。其身ながらの身の敵胸慾なげにこじつこう。惚れ腐つたとしやくり上げ。フシ泣
 くも。切なる心なり。地色御臺閣より走り出て。ヲ、頼もしや優しやな焦れ焦るゝ魂の。浮れて空に迷ふとは。我身
 ながらも恥かしきとても叶はぬ戀路ぞと。今は心に諦めて。ふつく思ひフシ切りしぞや。地色愛護の若を落してた

も。只管頼むと合はずも中に情や、フシ籠るらん。常世は膝を立て直し。詞嬉しい事を宣ふが御眞實にて候か。神神かけて嘘はない。地へア有難い忝ないお禮はゆる／＼申さんと。若君の手を取つて比叡の山におはします。阿闍梨の御坊は現在の現在の伯父上様にましませば。あれへお渡り遊ばしませ早やとく／＼と言ひければ。愛護の若は開し召し母上様や其方が。志は嬉しいが。詞親の不興を受けし身の縦へいづくへ行きたりとも。年端も行かてどの様な大きな料を致せしと。地色稚兒法師等に笑はれば生きたる甲斐もあるまじき。元の如くに縛めて父のお心休めうと。スエテ思ひ入つたる有様に。常世はわざと荒らかに。詞そりや曲がない若君様。左衛門や私が命にかけての忠義をば。お前は水になさるゝかと。御臺も共に諫むれば若君泣く／＼立上り。然らば仰せに任さんと踏みも習はぬ一人旅。常世跡から來てたも。父上お叱りあるならば。母様よきにとばかりにて。オクリ館をへ紛れ出て給ふ。フシ跡見送りて。地諸隣に。フシ泣く音を立てゝゐる内に。地色思ひがけなき清平公御太刀を提げて庭上へ。つか／＼と出て給ひ。詞ヤア何故に兩人は爰にゐるとの御詞に。地狼狽へ惑ひうぢ／＼ととかう答もなかりしが。地色御臺心を落し付け。詞斯く顯はるゝ上からはとても遁れぬ身の過り。地愛護の若は自らが館を落し候と。フシしを／＼として宣へば。地色常世はずつと差出て。いえ／＼左にては候はず。御家の寶を盗んだも私一つの心にて。御存知もなき若君に憂目見するが悲しさに。兄が手前を抜け出て斯くは計ひ候と。死ぬるを先に立てゝゐる。フシ物言ひさへも涼しけれ。詞ム、其管／＼。汝が盗んだ太刀鞍は愛護に預け置きたれば。一旦彼が手へ渡し館へ歸る其砌。地色持參致せと言ひ渡せコレヤヤレ長櫃持つて行けと。餘り嬉しき御上意に。答もやらす百千度打鎖いて會釋して。女の入らぬ力損今といふ今間に合ふと。櫃輕々と引提けて走出るを後より。御臺所はしつかと取り。詞是は自ら預らう。これ奥様。それでは最前立て給ふ誓文が無になります。ヲ、神の罰恐うない。我戀叶はぬのみならず鳩照姫にのめ／＼と。二世の下紐解かせてはどうも生きてはゐられぬ義理。どなたの御意でも此櫃は。地爰を出さじと取纏りきせ狂ひたる有様は。

フシ離れつべうは見えざりける。地色清平今はたまり兼ね御太刀を抜いて胸先を。貫き給へばコレ殿様。詞何科あつて自らに惨い死目を見せ給ふ。地色惨いつれない一念に親子の衆を三日が内。取殺さずに置かうかと。泣き叫びたる其聲はフシ恐しく。また哀れなり。地清平涙をはら／＼と流し。詞尤もなり。理よ。今言ひ聞かず一通り。篤くと心に得心あれ。お主が親の右大将悪心胸に塞がりて。娘の不便も打忘れ世に不都合なる戀舞は。二條家の寶をば奪取らんの謀計。逆意の程を奏聞して打滅すは易けれども。仇を仇にて返すれば子々孫々迄仇になる。地色馴れ親しむを幸ひに意見の加へ善心に。立返らせん所存にて勅答申せし夫婦の縁。詞嫁入つて来る其方は帯をも解かずまどろまず。身を堅めたる心底と。親子歪交はす時物思はしき有様と。老母が諫めの嶋臺と。三つを一つに思ひ寄せ。清平はよつく知つてゐる。いとしや悪い親持つて成るべき縁を引裂かれ。地女心の一筋に戀煩うて死なずんば。淵川に身を投ぐるてある。詞命一つを助けるは廣大無邊の慈悲といひ。堂の珊瑚の珠。碎くより猶殘念さに。地そなたの爲に清平が心一つに様々と。思案工夫をする内によしな賈の詮議だて。詞太刀鞍紛失致せしと世間へ沙汰を致さすは。右大将が貪慾の願ひを止めん謀計。誠は某盗み出し天子の御藏に納めたり。地愛護に越度はなければも手段を人に知らせぬため。預り主の科を著せ縛り搦めて剩さへ。詞屋敷を迷ひ出たれば暫し父子の縁切れたり。そなたを里へ戻すれば母といふ名も消えて行き。互に他人と他人との。内に契りも交せかし。地色跡をも慕ひ行けかしと工みし事も徒らよ。此長櫃の太刀鞍にも耳もあり又口もある。母といひ子といふ名を削らぬ内に見苦しき。立ち振舞ひを致せしは二條家も六條も。末代迄の疵になる。今死ぬるのは親への孝。夫への心中ぞや恨んでくるゝな六條姫。詞清平は腹をやる。そちが夫は愛護の若。地色夫婦は二世と云ふなれば此世の縁は薄くとも。徒名の立たぬ未來にて長き妹脊を契るべし。さは云ひながら是非もなき。惨い最期を見る事と。ステテしやくり上げてぞ。泣き給ふ。地色姫は苦しき聲を上げ。あゝさて嬉しのお詞や。つゆかゝるべきお心と。知らでやみ／＼朽果つる。フシ身の上こそ是非なけれ。地色逢ふにし

かへば鯨寄る浦の住居（いす）に寝れても。何かはつらく思ふべき飽かぬ別れをする時は。縦（た）へ千年を過（す）こすとも一夜の夢の心地ぞと。聞き習ひたる事ながらせめて一日片時でも。此世で妻よ夫よといひ語らばゞ斯く迄に。人戀しとは思ふまじ何を云うても悔みても。詮方波の立騒ぎ今死んで行く自らに。恨み妬（ねた）みもないものを鳩照様はいづくにぞ。愛護様の御事を。よく／＼頼んで死にたいに。逢はせてたへや人々とフシさめ／＼。泣いて掻口説く。詞ヲ、よい／＼合點合點。娑婆と冥途に二人嫁。地色清平も亦對面せんと自ら寄つて長櫃の。蓋取り給へば姫君は。闇を出てたる弓張の。眉泣き脹らし襟先も涙の常世諸共に。六條姫の御側へする／＼と走り寄り。詞なういとほしの有様や。地同じ戀路に踏迷ひ我やはつらき人や憂き。思ひもわかれて命さへ今消えて行く人ぞとも。知られず知らぬ中々に共にすげなうはしたなう。言ひ散らしたる恥かしや。自らとても下紐の關を越えねば定めたる。夫（つと）といふ名も知れねども。言ひ置かせ度き事あらば。心を残し給ふなと。スエテ共に消え入り。給ひけり。地色六條姫は玉の緒の切れ行く氣息をほつと纏（まと）ぎ。暫しは顔を打守り。詞羨しきは鳩照姫。世に恨めしきは我身の上。地夫（ぢう）といふ名は變らねど遠き未來で待つよりは。近き此世に千代や千世契り重ねて嬰兒（わが）達んで。松に小松に相老（ちやうらう）の諸白髮（もろしやう）迄添（そ）ひ給ふ。フシ行末さへも。ゆかしけれ。地色若君の御行末尋ね渡らせ給ひなば。詞清平公のお許して六條姫は未來にて。必ず女夫（めづ）になる筈と云うて語つて證據には。お前が立つて給はれや。此世はこなたへ貸します。やがてアノ世で受取るぞや言ひ置く事は是ばつかり。あら堪へ難や苦しやと。悶える中に残し置く。口ずさみやかくばかり後の世の。頼みになして戀死なん。生きて待つべき契りならねば。南無阿彌陀佛とばかりにて。秋に先立つ朝顔のフシ消えてはかなくなり給ふ。地色げに人界の有様は。かげろふ稻妻水の月。消えての後は親もなく子もなく妻も假りの名に。假りの契りを頼みにて鳩照姫は若君の。御跡慕ひ出で給ふ常世も共に夫（う）の顔。見まくほしさに旅衣。あはたつ山の哀れとは。死んで行く身と止まりて。子を思ひたる老鶴（らうかく）と思ひ較べて見較べて。亡（な）き魂（たましひ）は西の空焦るゝ我は東向く。跡には一人すつくりと名残惜しげ

に手を上げてさらば。さらばの聲々に。落つる涙は百千行。ばら／＼鳥の鳴かぬ間に別れ。別れに立出る

第 四 愛護の若道行

地高麗錦。フシたち馴らしたる。子心に。世は憂きものと白河の。はしたなき目に愛護の若今朝立出る旅衣。フシオクリ迷ひへ出でさせ。フシ給ひける。昨日は玉樓金殿に。冠の紐を結びしが。ステ今日は行路の旅草鞋。蹴上の水に影映す。オクリ姿の。花は散り行けど色がありとや蝶々の。裾に纏れて戯れて肩に宿りてひら／＼ひら。ひらりと拂ふ其先へ又飛ぶ翅のちら／＼と。關の東を教へ行く。あゝかはゆらし。フシしほらしや。汝さへ旅の。道通れと。思へど物は岩陰に。姿隠すも慕はしく梢々を打見やる。フシ棟のもとに。すつくりと。一人立つたる六條姫。我待ち顔に立寄れば。はつとばかりに驚きて。ステ暫し傾く笠の内。手を取られては跡へ寄り。纏るゝ袖を振放し。左へ走り右へ逃げ。覚えず帯のしやらどけを。わしが結ぶと走り寄り引締うて腰元を。とんと叩いて戴いて三下り歌若衆様には。黒いが似合うたえ。染めてさへ。染めてお召しやれく。ろ茶染え。染めてお召しやれく。ろ茶染え。ナホス櫻が。フシ枝に梅薫る。持合ふせたる女夫連。あやかり者と旅人の。オクリ見返る。振りも二度三度四の宮河原十禪寺。本フシ古蹟と。聞けば恥かしく。浮名や爰にとゞめんと。跡へさがりてフシ道草の。四片八仙花をるふりも。母をまくとや忍冬。花見る振りて待合はせ。オクリ先立ちへ行けば追着きて道守る神に。手向けする男思ひの誓ひには。逢坂山と繰返す若君は又いづくへも。長地追分とのみふる天雲の立隔たれといつしかに。人にや洩れんわが身の志賀の。里にぞ三重へ着き給ふ。

地湖の。懐。廣き志賀の里。住みよき宿も浪人は名字を植ゆる田を持たぬ。早苗之介勝重が貧を養ふ物としては。拜領の。鐵宿月毛生れもつかぬ小盗みの。夜々荒す瓜島たび重なれば顯はれて。ほだ足打たれ繋ぎ鳥立つも立たれず起き伏し

も。ならぬ所帯の煙絶え命も絶ゆる身の行方。ステテ無念涙にくれにける。地母は見る目の悲しさに外面へ出て林なる。晝の桃搦つ親の閣梯子入らずに剗缺。梢に棹は届かねど屈みて伸びぬ老の腰。そこよフシこゝよとする所に。地百姓ども駈來りの證見付けた老耄め。調扱々汝ら親子程横着者は又とない。行先もなき浪人ととこぼえたるが不便さに。地下に足をば泊めさせて慈悲を垂るればすりかわく。麥秋には首刈りする稻の穂を抜く夜綿をとる。どことも畠盗人は其座で埋むが法なれど。三井寺の領分だけほど足打が宥免ぢや。地色祖母も今日より同罪と。足手を取つて引張れば。調早苗之介はア、コレ待つて下されませ。段々の御腹立ち尤も至極さりながら。老母が桃を騙れしは。某斯様の有様を堪へ難かると問はれし故。母に苦勞をかけまい爲いや／＼さうは存せぬが。坐つてばつかりある故に太股に實が入つて。よだるう御座ると答へしを。御存じのかな艶なま中の儀を聞きはつり。ム、桃に實が入り喰ひ度いとや。地こそ心得たと駈出て斯様な粗忽を致されしも。某が詞の科打ちも叩きも遊ばされ。科なき母は御救しとフシ手を摩り詫ぶるぞ道理なり。地色親に孝ある一言は田夫の身にも聞き入れて。然らば婆々めは赦してやるおのれが科は今日より。桃盗人の制法に過忌も桃栗三年ぢや。柿なら八年かゝらうに仕合せ者めと聲々にわめき。散らして三黒歸りけり。フシ御痛はしや。若君は。習はぬ旅の物憂きに幻ぞとは露知らぬ。御臺所は跡追うて附添ひ給ふ煩ささに。心を苦しめ氣を痛め。ステテ走り抜けたる玉鉾の。道の疲れも顧みず。急ぐ心にやう／＼と。一村里の木蔭にぞ。フシ泣く／＼辿り着き給ふ。地色暫らく氣息を押鎮め。跡振返り眺めやり。いまだ程なき事なれば追着き給はん悲しさよ。何卒爰を行抜いて比叡山へ登りなば。女人は叶はぬお山と聞く。さあらば此道急がんと心ばかりは進めども。御所を出てさせ給ふより。酒飯ふつと絶え果て、食べさせ給はねば。しを／＼と立つ桃林フシ枝も高くに見えけるを。是幸ひと杖振上げ。丁々と打ち給ふ。地老母は見るより腹を立て。詞憎しさもし、小冠者め。其桃搦つて自らを又候憂目見するかと。地色ずか／＼と走り出て側なる棹を追取つて。殿り情もなう悲しやと若君は。あなたこ

なたへ逃げさまよひ。旅に疲れし者なるに赦し給へと宣ふ聲。小家の内なる早苗之介顔差出し見るよりも。詞なう若君様愛護様。是母じや人く。地色やれ是なうと身をもがき行かんとすれど足立たず。兩手を舉げて是々と。呼べど招けど聞かばこそ跡も見向かず打つ杖を。あしらひ兼ねて若君はなう早苗之介爰へ来て地とどめてたも勝重と。お主は杖の下に泣き。子は坐ながら泣叫び。やれ勿體なや母じや人。廿年來引込んで若君こそは見知らずとも。形恰好にも面差にも。清平公の戀者とは。思し寄らぬか淺ましや。斯く成り果つる憂き苦勞皆御主人への爲なるに。武士の冥加も忠誠をも。無になす親の恨めしやと。小家を動かし足摺りし。紅亂す顔色は。地獄を巡る目蓮の母を。フシ見付けし如くなり。地色老母は何の辨へなく。猶振上げて打つ杖に。フシ泣く音や空に歸りけん。麻吹き分ける風の隙。六條姫は現はれ出て。袂の下に若君の。スエテ身を隠す間もありやなし。老母いよく腹を立て。詞小冠者め一人と思ひしに。女郎め迄が隠れ居て。桃を取るさへ腹立つに麻まで荒す憎さよと。地色又さんくんに打つ杖を姫は愛護の楯になり。子は又母を打たせじと。互に杖の下に寄り。孝と戀との二道に我身厭はぬ有様を。勝重見るよりきよつとして。愁の涙忽ちに眼瞼し肘を張り。胸押摩り氣息を詰め。物をも云はず打守る。此世にあらぬ繼母ぞと。スエテ知らぬ。心は道理なり。若君は聲を上げ。やれ早苗之介胸怒なり。現在主の打たるゝを守り居るのは何事と。云はせも敢へず。詞ア、しゃべるまい聞きとむない。早苗之介はついしかに四足殿に奉公せぬ。主でない家來でない。急いでそこを立つて行こ。若君呆れ顔振上げ。ム、主でないならぬ迄よ。四足殿とは誰をいふ。ハ、く非道の戀もする氣から。詰開き迄あがつたの。手を引合せてぞらくと面白からう嬉しかる。世界國土の樂しみに。女と戯ふれ遊ぶ程面白い物はない。此勝重はこなた故獨寢をして居ますぞや。地千に一つも斯様なる倉相な事があらうかと。常世をこなたに付け置いたが。詞ア、盗人の隙あれど守りての隙なかりしな。地大織冠より數百年相續いたる二條家が。今日の只今滅亡した。地色御家がなければ勝重はどなたに勘當許されて。誰に奉公仕る腹切つて死ぬる身ぢや。詞圍ま

ひ度うても圍まはれぬ。早苗之介は慘けれども清平公のお心には。片輪なる子が可愛いとて又御不便が残るであらう。地世間へ廣うならぬ内悪い性根を入替へて。館へ歸つて詫びさしやれ。詞只今打擲しられたは。こなたの誠の御袋が。諫めの杖と思しなば。地色無念な事も何にもない。急いで京へ歸らしやれへちまうてなりや勝重が。兩人共に打殺すがどうぢや〜と責むれども。言譯すれば母様の。御身一つの浮名ぞと。答もやらすさめ〜とフシ泣く音。ばかりにおはします。地老母はつく〜打守り。詞今といふ今合點がいた。心中をしに出たのぢやな。爰は日陰で悪からうあの辛崎の一つ松。地首縊るのによい場所と小家の戸。フシさいて入りにける。地色若君涙にくれながらエ、胴怒な早苗之介。たとへ鳥類畜類でも。親子の禮は知るものを年端もいかぬ愛護とて。道ならぬ義のあるべきか今かゝる身になつたれば。扱は汝も見捨てしな。神代此方主として家來の者の杖を受け。手を合はしたる例はなし。地打叩かるゝは厭はねど後代人の笑ひ草。なんなり末の悲しやと又むせ。返り泣き給ふ。地色稍御涙の下心。怒らせ給ふ故やらん松の塵拾ひ取り。小家の片壁墨黒に。細工の姥が惜しみつゝ。我を打つたる其仇に。花は咲くとも桃なるな。麻を蒔くとも苧になるな。穴生の里の。あるらん限りは。二條の若とフシ筆捨つる。末の世迄も桃ならず。麻は繁れど苧にならぬ。里をば過ぎて行先も。娑婆と冥途の中々に二人が。仲こそ三稟浮名なれ小波や。志賀の山風吹き荒み。釣する海士の舟ならて焦れ焦るゝ胸の火に。鹽こそ焼かぬ鳩照姫。常世一人を力草小松若松搔分けて。戀する人に大比叡や。フシ坂本にこそ着き給ふ。地色習はぬ旅に兩人は。杖を力に弱々と。フシ手を引き山に差しかゝる。地色半町ばかり登りしが不思議や俄に足痛み。胸騒して向ふよく突くとはなしにかつばと倒け。先々と進む爪先は劍を渡る如くにて。震ひわなゝき働かず姫君はつと心付き。詞誠に爰は唐土の四明の洞を移されて。女人結界なりけるを破らんとせし勿體なや。地色是に付けても世の中に。罪の深きは女の身の中の女にも自らは。迷ふが上の戀の闇い。つかは暗るゝ憂身ぞと。雲入る嶺を打見やり。二人はどうと座を占めて。スエテ呆れ。果てゝぞおはします。地色が

かる折節山上より山賤一人下り来る。常世嬉しく立寄りて。詞申し、柴刈殿。比叡山の南谷阿闍梨のお寺を尋ねる稚兒。地先達つて參られしがいかゞ便りを致さうぞ。教へてたべと宣へば。詞柴刈り横手をちやうど打ち。身どもも夜前その坊の臺所に居ましたが。夜半の過ぎでもござらうが。門荒けなく打叩き愛護とやら舞子とやら。都の甥とて來りしを。僧正不審に思し召し。夜陰に至つて何故に尋ね來らん様はなし。扱は谷々の天狗ども。阿闍梨が力引き見んため愛護と偽り來りしな。地それ追出せと宣へば逸男の若法師。我劣らしと走り出て。詞こりやく、丁稚。帥の阿闍梨の御一家と騙事言ふ賣僧者。さあ失せぬかと言ひさまに是非をも聞かず打ちければ。地あつとばかりに平伏して。杖を赦して給はれと。手を合はせども聞入れず。まだ頬笄を叩くかとさんく、に叩き伏せ。門戸を締めて寄せ付けず死んだであらうと存じたが。人の命はつれないものあれ、あれなる杉の木の。そこ迄は來て行き倒れまどうごうごとして居た故。地色若し近邊に其方が知るべの者のあるならば。傳へてやらんと尋ねしに早苗之介といふ者が。穴生の里に居ますれど是が方へも行かれぬと。我身を恨み世を恨み伯父坊恨み親恨み。泣いつ口説いつ今頃は大方命もないである。お通と聞けば痛はしや。貰ひ涙がこぼるとヲシ教へてこそは。通りけれ。二人ははつと氣も消えて。こは何とせん淺ましや。現在お主や我夫の。死ぬる生きるといふ事を聞いても側へ行く事の。ならぬは何の因果ぞと。膝と膝とに凭れ合ひ。スチ聲をばかりに。泣き給ふ。地色常世は涙拭ひまだ佛神の御加護にて。夫の在家を承る穴生とやらへ尋ね行き。勝重殿を同道しお山へ登せ申すべし。暫し御待ち候へと。オクリそのまゝ一里へ急ぎける。フシ跡には姫君。只一人。深山の鳥の聲のみぞ。我に言問ふばかりにて道行く人も見えざれば。よすが尋ねんやうもなし。さしもに高き山が嶺を見上げ見下し立ちつ居つ。姿も亂れ氣も亂れ。梢に取付き伸上り岸に凭れて飛上り。駈登り搔登り。轉び落ちては這上り。茨伏柴身を裂きて。腸を斷つ猿よりも。勝るは我が戀ひしさぞ。なう愛護様く。なう若君と張り上げて歎き。叫ばせ給ひける。地色無慚な愛護の若。杉の木の間に打臥して。はや消えかゝる玉の

緒を結びとめたる山彦やまひこの。愛護々々と答ゆるもやうくとして起上り。杖に縋りて。フシよろ／＼と。一足行きては氣息いきを繼つぎ。二足來てはひよろ／＼と。オクリよろほひに給ふフシ有様を。地姫君見るに堪へかねて南無や山王大權現みこと。塵ちりに交まじる神心穢けがれを許し給はれと。そなたに向ひ手を合せする／＼と駈登り。若君の御手を引き。オクリやう／＼に麓ふもとに下り立ちて。地色互に顔を打ち守り。變り果てたる佛を。御見忘れなされしが鳩照姫にて候ぞや。御いとほしの有様やと。スエテ抱き付いてぞ。泣き給ふ。地色暫らくあつて若君は稍御心鎮まりて。詞なう嬉しの人の情やな。まだ解とき初めぬ下紐しもぢの行巡りたる二世の縁。地今より末は變らじと。綻ほころびそむる花の笑わらひ。うつろふ菊に白露をフシ十分持てる氣色けしきなり。地色鳩照姫も今の間に憂うれひの色いろの面變り。手を取組んで膝寄せて憂うれさとつらさを取交へ。六條姫の御最期を御物語りありければ。若君はつとばかりにて覺えず御手を打ち給ひ。詞ことは何といふ身の上ぞ夢か現か幻か。地色今は此世に亡き人の附添ふ影とも知らずして。道なき事と思ふから跡へ下りつ先へなり。すげなう見せし問ひ答へ。厭いとひもやらで是迄は跡を慕うておはせしが。女とどめるお山には魂とても叶はぬか。爰に待つぞと立止まり別れて過ぎしは昨日きのうの夜。今日又同じ麓にて御身に巡り逢ふ事も。定めなき世の定めとは。思ひ出るも恥かしや。何れを戀この淵瀬とも。知らぬ此身に浮名立ち。親の不興を蒙りて命生きても何かせん。思ひ極めて候と。しやくり上げ／＼。涙の音は聞えねど。流れは。瀧に較べ合ふ。地色姫君世にも悲しくてよしなき事を宣ふな。詞父上様の仰せに六條姫は冥途の妻。此世の妻は鳩照姫二人の嫁とあるからは。地色浮名不孝も待らず心に懸けさせ給ふなと。諫め給へば愛護の若。愚かの事な宣ひそ。地父の慈悲なるお詞が。フシ今は我身の仇なるぞや。地未來の妻が待ち兼ねて。冥途へ我を招く故。家來の母の杖も受け早苗之介にも見限られ。辛つらかるまじき伯父上おぢに慘あはれなうしられしも。死ねと草葉くさばに守るらん縦へ都へ歸つても。親子の縁も氣遣はし妹脊の仲は猶なほしかに。妨げられて添ひ果てぬ歎なげきに袖を濡ぬさんより。詞自ら不便に候はゞ冥途の道へ伴はん。いざさせ給へと宣へば。地鳩照姫は打領うちりょうき。フ、よくこそ誘ひ給

はりし。年月沈む戀の海。龜の浮木は得たれども此世の夫と結び置く。帶さへ未だ解かぬ間に。未來の妻へ戻すのは。思へば淺き縁なり昨日は人に羨まれ。今日人は人を羨むも同じ戀路と三つ瀬川。とても思ひ詰め給はゞ。當世が辰らぬ其内とフシ勸め給ふぞわりなけれ。地若君世にも嬉しげによくこそ思ひ切り給ふ。詞煩惱も是もと善提。地色假りの浮世に假りの夢せめては跡の詠めとて。弓手の片袖引きほとき小指の血汐染め衣に。残し置きぬる泡沫の泡と消えぬる御形見。霧生が瀧の杉の枝に結びとどめて手に手を取り。南無阿彌陀佛と諸共に。涙の瀧津水底に。入りて形はなき跡も。袖掛けの神杉とて今の。世迄も三重ありとかや。フシ然る所へ。勝重當世は駆來り姫君いづくにましますと。そこよ爰よと尋ねしが袂掛けたる杉の枝。怪しやと見る菊が紋淺黄が裏の紅に。地長らへば又爰目をも水底の。深き心を入りて知らせん。愛護の若と。地讀みも終らずこは南無三寶遅かりしと。泣くも泣かれず齒を喰ひ詰めフシ足摺りしてこそ居たりける。地色早苗之介は聲を上げ。なう愛護様若君様。御短慮な事をなされたなう。詞御臺此世に亡き人と某知らう様はなし。不義と一途に存せし故物柔に申しては。地色お心は直るまいお前が思し切られても。女は離れにくいものあた胸慾に云うたらば。館へお歸りなされうかと勿體なくも家來の身で。言ひ散らしたる悪口が。お腹が立つての御最期か。母が杖を當てたのが無念でお果てなされたか。追着きます若君様。お供に召連れ給はれとフシ既に自害と見えにけり。地常世周章て、取付けば。詞ヤア狼狽へたる女房。死ないて武士が立たうかと振放す手をしつかと取り。成程死にたか死なせましょ。併し落度の詮議ならこなたより先づ伯父坊様。人圍まふは出家の役他人なりとて捨て給ふは。いづれの法にある事ぞ。地色誠不審に思すなら虚實を糺し給ひてこそ。沙門の法も立つべけれ對面をだにし給はず。叩き出せとは何事ぞ。一禮言うて其上に差違へて死なしやれと。ことわり立つれば早苗之介。詞誠にさうぢや坊主首。いて打落して腹愈んと。地色既行かんとする所へ阿闍梨も周章てふためきて。氣息をばかりに御出てあり只今人の風聞に。詞愛護が身をば投げしとは誠ならずと思ひしに。兩人是に居るからは扱は若にて

ありけるか。地それとも知らず情なく寺へ寄せざる殘念と。スエテ涙を流し宣へば。地早苗之介すつと寄り。ヤイ胴窓者の伯父坊主。叡山法師はどれとも人に人を殺すが法なるか。若君へのお手向に坊主首をば賜らんと。反打つて突つかかる。阿闍梨騒げる氣色もなくヲ、尤もく。愛護が命の終つたは定業なれば是非もなし。愚僧に恨みを殘したる非業にてあるならば。加持の力で蘇生せん先づ鎮まれと宣ひて。地御衣の袂を結び上げ水晶の數珠押揉んで。天を仰いで三禮あり。地を指差して再禮し。瀧に向うて秘印を結び振鈴雲に響かして。發願をこそ述べられけれ。フシおほけなく浮世の。民におほふかな。我立つ杣に。墨染の袖。志學の春の始めより。經藝の花香ばしく耳順の秋の夕には。玉泉の水底清し。瀬田の螢は孫康が窓に古今を照らし見て。無明の眠り醒め易し。比良の高根に。雪降れば。車胤が眼鏡を忘れしなり。妄執の雲打拂ふ。嵐につれてあれ。あれく。苦海を渡る船なんめり。彌勒慈尊の鬘をいつと契りて撞出す。ヨハリ圓城寺の鐘の音。悉有佛生有明の石山寺の秋の月。三諦即是目前に止觀の胸を觀念す。浸染妙有の文字を捨て。法界東流の聲を離れて一實相の。眼の前には死にもせず又生れもせず。況や非業の童男童女。ナホスフシ愛護並びに鳩照姫が。蘇生の效驗ならしめ給へ。歸命。頂禮金仙氏。佛眼金輪五壇の法。一字金輪孔雀經。七佛藥師熾盛光。烏鴉沙摩隨求大佛頂。五大明王六觀音。六字河臨訶梨諦母。八字文殊普賢の法。那膜。所願虚空藏天には。三諦七曜九曜廿八宿別して山王廿一社の大權現。頓法成就ならしめ給へと責掛けく。祈らる。フシ時に山鳴り。地色瀧波は渦を巻き上げ巻きおろして。六條姫は忽然と波の上に現はれ出で。地過去拘留尊佛の昔より愛護と我とは生々世々。怨敵の餘執故只今命を取つたれども。大聖の法味を受け成佛得脫致したり。猶此末を守らんと云ふかと思へば波の底。形は消えて愛護の若姫君諸共瀧壺より。手を引合うて出て給へば夫婦は奇異の思ひをなし。阿闍梨を三拜百拜し二人を二人が肩にかけ。喜び勇んで立歸る佛力神力擁護力三つの要に末廣の扇の風や家の風。松は素直に竹素直く。齡は千鶴萬鶴も。變らぬ常磐堅岩やと傳へて。今も與じけり

第五

地身體髪膚はたらちねの枝葉まつたき孝の道。愛護の若君鳩照姫蘇生の喜び祝言の。祝ひは二つ山王の恵み尊き神祭。七社の御輿御船に飾り三千の衆徒悉く。甲冑弓箭帶しつゝ、惡魔を拂ふ氣を顯はし。漫々たる湖水の面ヲシ錦を流す如くなり。地色陸には二條の左大臣清平公を始めとし。樞大納言爲道卿若君御夫婦御伴ひ。時に葵の風薫る水干淨衣みやびこに。舍人牛飼難色まで。あたりを拂ふ行装は目を驚かすばかりなり。詞左大臣清平公參詣の諸人に向ひ。笏取延べて宣ふやう。抑も此比觀山と申せしは。王城の鬼門を護り惡魔を拂ふ時のみならず。地一佛乘の嶺と申し。鴛の御山を象れり。地色又天台と號するは四明の洞を移すなり。實相無我の春の花ならずして香ばしく。大乘戒會の時鳥ヲシ待たぬ先より聲清く。平等利益の新月は。二千里の外明らかに。生滅滅已の雪の色都の。富士の名も著き。我が立つ杣の杣木挽く。伐木とくくりんくと。根本中堂文殊樓麗にあたつて波止土濃は。智水の波も濃かに和光の塵に交はりて。衆生を導き。給ふなり。有難や一切衆生。悉有佛性如來と聞く時は。女人の身迄も頼もしや。嶺には。遮那の梢を並べ。麓に止觀の海を湛へ又。戒定慧の三學を見せ。三塔と名付く人は又。一念三千の。機を顯はして三千人の衆徒を置き。圓融の法も曇なき月の横河も見えたり。擬又麓は小波や志賀辛嶮の一つ松。國家安全長久の齡を見する地しるしの松。あら有難やと演説あり御手を合はさせ。三重給ひけり。地色然る所へ軍勢一度に合圍の聲を立て合はせ関をどつとぞ上げたりける。詞荒木の左衛門駐蹕かりこは何者の狼藉ぞ。名乗れ聞かんとありければ。駿河の前司國則一陣に駈出し。問ふにや及ぶ近國折角巧んだ企てが。無になるといひ剩へ姫君迄失はれ。地靜懐を散ぜんため右大將有雄卿。御出陣なされしぞ。清平が首打つて降參せよと罵つたり。詞早苗之介飛んで出ていや推參なりおのれ等。姫は御臺に送るから斬らうが突かうがこち次第。時もこそあれ日もこそあれかゝる神事を妨げて。地御輿を穢す無

愛護若崎箱終

道者いで物見せんと云ふよりはや。兩陣互に群つて火花を散らし三重へ戦ひける。地色殊には又思ひ寄らざる一戦故。軍勢心奪はれてフシ残り少なに討ちなさる。寄せ手はいよ／＼勝つに乗り揉み立て／＼攻寄せたり。調荒木の左衛門早苗之介すは御大事と駈塞がり。地兩人一所に押並び多勢を前に引受けて。はらり／＼と難ぎ倒すさしにも勇む寄せ手の勢。早苗之介荒木に切り立てられフシ暫し弛んで見えにけり。地色然る所へ駿河の前司無二無三に追駈け。近國が後襟肩先かけに斬込うだり。調早苗之介勝重取つて返しむづと抱き。地足踏み直し釣上げて大地にどうど取つて伏せ。首を搔かんとしたりしを左衛門暫しと押し止め。調敵は一人味方は二人あつたら物を無下にはならじ。地色それこなたへと引起し左右の腕を引抜きて。寄せ手の陣へ追返すはフシ心地ようこそ見えにけれ。地色大將有雄肝を消し馬引返し逃げ引くを。船中の衆徒太刀長刀觸らば冷せと追取り巻き。神罰冥罰思ひ知れ思ひ知らずや山王の。神勅なるわと首打落しサア／＼還御を急げや。御輿を渡せや囃やせ觸らば冷せと打つ太鼓。神すゞしめの囃し言目出度き。國の御守り。

